

見事なり？藤原薬子

2021 年 8 月 5 日

我部山 民樹

1. はじめに

薬子について学生時代に学んだ覚えはあるが、「薬子の変」だったか「薬子の乱」だったかも覚えていない。‘くすこ’しか記憶に残っていない。「兵を持たない女性が謀反を起こすって妙？」と思った記憶はある。事変の中身は全く浮かんでこない。その後も何かと薬子の名前を聞いたが、調べなかった。未だに分からない。

「薬子の変」の主演は当然薬子と思っていたが、調べていくと異論があるのが分かった。2003 年ごろより一部の高等学校用教科書では「平城太上天皇の変（へいぜいだいじょうてんのうのへん）」という表現がなされているようだ。律令下の太上天皇制度が王権を分掌していることに起因して事件が発生した、という評価がなされるようになったからだそうだ。また専門家の中では嵯峨天皇が平城上皇に配慮して「薬子の変」にしたのではないかとの指摘もあるようだ。律令制度に起因して平城上皇が引き起こした事件なのか、それともその背後で天皇を操っていた藤原薬子とその兄・仲成が中心になって引き起こした事件なのか？

誰が事変の主演なのか？

そして「薬子」とは？

2. 藤原薬子

藤原式家の藤原種継の娘・薬子は、中納言・藤原縄主の妻で三男二女の母だったが、娘婿の安殿親王（あんでんしんのう、のちの平城天皇）とのスキャンダラスな関係に始まって、やがて政治にも介入し、男社会の宮廷をかきまわすことになる。

「薬子の変」に至る背景と経緯は以下のごとくである。（ウィキペディアより引用する。）

幼少の長女が桓武天皇の皇太子・安殿親王の宮女となるとこれに伴って宮仕えに上がり、東宮宣旨（とうぐうせんじ、東宮付の女房の筆頭）となるが、やがて娘を差し置いて自身が安殿親王と深い関係となった。桓武天皇は怒り、薬子を東宮から追放する。

806 年、桓武天皇が崩御して平城天皇が践祚（せんそ、皇位につくこと）すると、薬子は再び召され尚侍（しょうじ、内侍司の長官）となる。夫の縄主は太宰師として九州へ遠ざけられる（薬子の差し金といわれている）と、天皇の寵愛を一身に受けた薬子は政治に介入するようになる。兄の藤原仲成とともに専横を極め、兄妹は人々から怨まれた。

○薬子と安殿親王の関係

【安殿親王が縄主と薬子の長女を「妃にほしい」と申し入れてきた。縄主は娘が皇太子妃になることを期待し喜び、吉日を選んで娘を東宮御所へ送った。長女はまだ幼く、世間知らずで宮中のしきたりにも慣れていないので一人では心細いだろうと縄主がすすめて薬子を同行させた。しかし安殿親王は「妃にほしい」と願った娘よりもその母である薬子に夢中になり、いつまでも引きとめて帰そうとはしなかった。安殿親王はこのころ、30歳の壮年期であった。やがて「安殿太子は臥所(ふしど、寝床)の両脇に母と娘をはべらせ、夜ごと三つどもえの痴戯にふけておられるそうだ」と噂に尾ひれがつき、恥ずかしくて縄主は出仕できず引きこもってしまった。桓武天皇は立腹し、東宮御所に乗り込んで親王に薬子と関係を絶つように言い、薬子には夫のもとに帰るよう厳命した。

桓武天皇の怒りに薬子がどのような反応をしたか、史料は無いが、作家の杉本苑子は『海の翡翠』の中で描いたように、桓武帝が親王時代に義母と関係を持った過去(注. 1)を指摘したのではないかと推測している。母の身分が低かった桓武帝が即位し権勢をふるった背景には、薬子ら藤原式家の力が大きく、複雑な事情が存在していた。安殿太子が命に従わず薬子を夫・縄主のもとに帰さず別邸に移して夜ごと通うのを隠そうともせずそのままにしたことから、その説には説得力がある。】(ウィキペディアより)

注記 1. 桓武天皇の親王時代の過去

鎌倉時代初期の歴史物語『水鏡』より

光仁天皇が皇后(井上内親王)に自分が勝ったら後に絶世の美女を紹介してもらおう。自分が負けたら後に若く逞しい男性を与えよう。」と言い、結果皇后の勝ちであったために皇子の山部親王(のちの桓武天皇)を差し出したところ、皇后が若い親王に夢中になってしまった。

桓武帝は光仁天皇と高野新笠(たかののにいがさ)の間の子で、後に光仁天皇の妃・井上内親王の娘・酒人内親王(さかひとないしんのう)と結婚した(当時は同母の兄妹以外の結婚は普通だった)。桓武帝が親王時代に義母と関係したことになる。親王が桓武天皇の命に従わなかったことから、「水鏡」の真実性が浮かび上ってくる。

もう少し、経緯を別の確度から見てみたいので、童門冬二著「歴史の仕掛人」を引用する。

【・どっちが仕掛けたのかは分からないが、安殿親王と薬子が情を通じてしまった。安殿親王は薬子母娘と通じことになる。女の親子どんぶりである。

・怒った桓武天皇は薬子を宮廷から追い出してしまった。安殿親王の世話をする役所の長官だった東宮大夫・藤原葛野麻呂(北家)は桓武天皇に報告したのだろうが、薬子はこの葛野麻呂とも通じていた。(安殿親王との関係を見逃してもらいたかったという

ことのようにだが、)それがばれて葛野麻呂は九州の太宰府に追われた。その東宮大夫の後任に座ったのが何と薬子の夫の縄主である。薬子と言う妖女によって男たちは振り回されていた。

・もっと恐ろしいことを始める。

806 年、桓武天皇が崩御すると、安殿親王が皇位につき平城天皇となる。すぐに薬子を呼び戻し、尚侍と言う重要なポストにつけた。天皇への報告や、天皇からの指示・命令の伝え手である。天皇はふたたび薬子を宮中に戻し、焼けぼっくりに火をつけた。それほどの魅力がこの女にはあったらしい。それだけではなく夫の縄主を九州の太宰府に飛ばしてしまった。馴染みのあった葛野麻呂をもう一度東宮太夫に呼び戻した。薬子によって人事はメチャメチャになった。

・これだけの魅力をたたえた薬子の歳が分からない。五人の子供を産んでいたのも少なくとも四十歳は過ぎていたはずだ。平城天皇はのころ三十二歳である。薬子の色香にはかなわなかったらしい。

・葛野麻呂はふたたび都に帰ることができたが、その前にひどい目に遭っている。遣唐使を命ぜられた。遣唐使は舟で難破するとかいろいろな難関があったので、そういうことを知りながらあえて遣唐使を命じたのは「どこかで死んでしまえばいい」という薬子の意志が働いていたに違いない。

・こういうように、男たちの人事を私意によって振り回していった薬子は、兄・仲成だけは、有力なポストにつけてもらい続けた。ところが、この仲成というのが性悪（注. 2）で、至って評判が悪い。権力をカサにきて、弱い者いじめをする。またすぐ女性に手を出す。

・「あの兄妹はどうしようもない」という悪評が、宮廷中に充満していた。にもかかわらず、807 年、薬子兄妹は桓武天皇の息子・伊予親王を自殺させた（注. 3）。伊予親王の母が、南家藤原氏出身の吉子だったからであろうか。「何かのキッカケで伊予親王が次の天皇になるかもしれない」と考えたにちがいない。無実の罪で、この親子は毒を飲んで自殺してしまった。

これが気の弱い平城天皇を苦しめた。そして薬子に相談することもなく、平城天皇は突然 809 年 4 月、退位してしまった。皇位は皇太弟だった神野親王に譲られた。神野親王は固辞したが、止むを得ず皇位についた。嵯峨天皇である。】

注記. 2 藤原仲成（日本後紀による）

仲成は生まれつき凶暴で心がねじれ、酒の勢いで行動するところがあり、親族の序列に従わず、諫止する人を無視し、妹の薬子が朝廷で勝手な行動をするようになると、その威を借りてますますわがままな振る舞いをした。多くの王族や老齢の高徳者が辱められた。（中略）

今回、射殺されたことについて、人々は皆、「自ら招いたことである」と言った。

注記 3. 伊予親王の変

桓武天皇の第 3 皇子・伊予親王（平城天皇の弟）が、謀反の疑いをかけられて、その母・藤原吉子（南家出身）とともに川原寺に幽閉され自殺した事件である。

この事変の背後に南家失脚をねらう藤原仲成・薬子兄妹（式家）の策謀があったとされ、兄弟が藤原宗成を唆して伊予親王に謀反を勧めさせ、更には平城天皇を煽り立てて伊予親王親子を自害に追い込んだとされる。伊予親王は「宗成に謀反を唆された」と平城天皇に申し出ているが、その後で宗成が「伊予親王が首謀者である」と自白したので、平城天皇は激怒し、伊代親王親子を捕らえさせ幽閉した。二人は身の潔白を主張したが聞き入れられず、11 月 12 日にそろって毒を飲んで心中したという。

のちに二人の無罪が認められ、墓は山陵（天皇、皇后などの墓）とされた。

宗成は流刑に処された。宗成は兄妹に唆されたともいわれているが、詳細は不明。但し、この事件以降平城天皇と仲成・薬子との結びつきはさらに強固なものとなったらしく、尚侍であった薬子の昇進を考慮して、事件の直後に尚侍の官位相当が従五位から従三位に引き上げられた。

また、この事変後、藤原南家は大幅に後退していった。

事変の後、平城天皇と仲成・薬子との結びつきがさらに強固になっていったこと、薬子の官位昇進が行われている。また、藤原南家出身の吉子・伊予親王親子を追い落すことにより南家が衰退し、式家の仲成・薬子はさらに権勢を振るうことになる。これらの状況証拠からは仲成・薬子が事変に深く関与し、裏で天皇に強く働きかけたと解釈すべきである。

3. 「薬子の変」

「薬子の変」（くすこのへん）とは、平安時代初期の 810 年（大同 5 年）に起こった政変。806 年（大同元年）に即位した第 51 代天皇・平城天皇（へいぜいてんのう）は、わずか 3 年で退位して平城上皇（へいぜいじょうこう）となり、809 年 4 月（大同 4 年）に弟の嵯峨天皇が即位する。809 年 12 月、「平城上皇」は平城京に移る。（すでに病気から回復していた）平城京の宮廷に戻った上皇は新しく宮廷を築き、役所も整えた。腹心の公家もたくさん連れていった。

平安京と平城京に朝廷が並立するようになる。

平城上皇に寵愛を受けていた女官「藤原薬子」（ふじわらのくすこ）や、その兄・藤原仲成（ふじわらのなかなり）が重祚（じゅうそ：退位した天皇が再び位に就くこと）を画策し、平城京への遷都を図ったために

二朝の対立は決定的になる。平城上皇と嵯峨天皇は対立を深め、やがて武力衝突寸前まで発展。表向きは上皇と天皇の対立だが、裏では藤原仲成・薬子兄妹が暗躍したと言われている。

平城上皇がわずか3年で嵯峨天皇に譲位したのは、自身の健康上の理由があったからである。病気の理由を「早良（さわら）親王や伊予（いよ）親王の祟り」と考えてのことだ。809年（大同4年）の11月頃には、平城上皇の病状は回復。反対に、翌810年（弘仁元年）の1月頃から、今度は嵯峨天皇が病に伏すようになる。

810年9月6日、律令制度の基づき平城上皇が平城京遷都の詔勅を出す。

嵯峨天皇は困り果てたが、坂上田村麻呂の具申を取り入れ「（平安）京を、もう一度平城に移す」という勅語を出す。田村麻呂の意見は「藤原薬子を解任して、宮廷から追放する、薬子の兄・仲成を捕らえて、佐渡の島に流す。ただし、平城上皇には何もしない」であった。

嵯峨天皇は平城上皇側に軍事行動を起こすことにして、その総司令官にするという含みを持たせて田村麻呂を新都造営の責任者に任命する。

田村麻呂の行動は機敏で、すぐ薬子の兄・仲成を捕らえて牢に入れた。（のちに仲成は射殺された。）

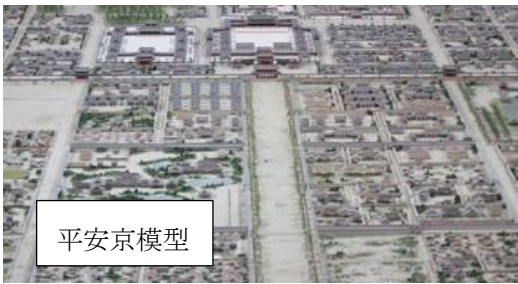
嵯峨天皇の企てが平城京の都に伝わり、聞き及んだ薬子が上皇をそそのかし、女ながらに作戦計画を立て進言し、平城上皇は薬子の言に従い、兵を集めたがあまり集まらない。

薬子が「どうか、お気を強くお持ちください。平城京を出て三つの関をおさえ、諸国に向かって呼びかければ必ずたくさんの兵が集まります。ここを出るときは少人数でも、やがておびただしい軍勢になるでしょう。大海人皇子様のときもそうでした。」と励ました。平城上皇は本気でその言葉を信じたわけではないが、他取るべき道はないので、薬子を連れて、わずかな兵を率い、平城京を出た。薬子の言った「壬申の乱」（注. 4）にならおうと思った。が、田村麻呂が三つの関に軍勢を派遣し、そこを抑えていた。あらゆる方向から包囲されていた。上皇は諦めて、平城京に戻って剃髪し、仏門に入った。さすがの妖女もどうすることもできない。薬子は平城京の宮廷の一室で、潔く毒を飲んで死んだ。研究者によれば四十六、七歳ぐらいではなかったかと言われている。（童門冬二氏の資料他を参考にする）

尚、平城法皇は変の後も朝覲を受けるなどの名誉ある待遇と相当の宮廷費を受けた。

注記 4. 壬申の乱

皇弟・大海人皇子は天智天皇に対し、天智天皇の太子・大友皇子を皇太子として推挙し、自ら出家を申し出て、吉野宮（現在の奈良県吉野町）に下った。天智天皇崩御後、大友皇子に対し、大海人皇子（後の天武天皇）が兵を挙げて乱が勃発した。反乱者である大海人皇子が勝利するという、日本では例を見ない内乱であった。

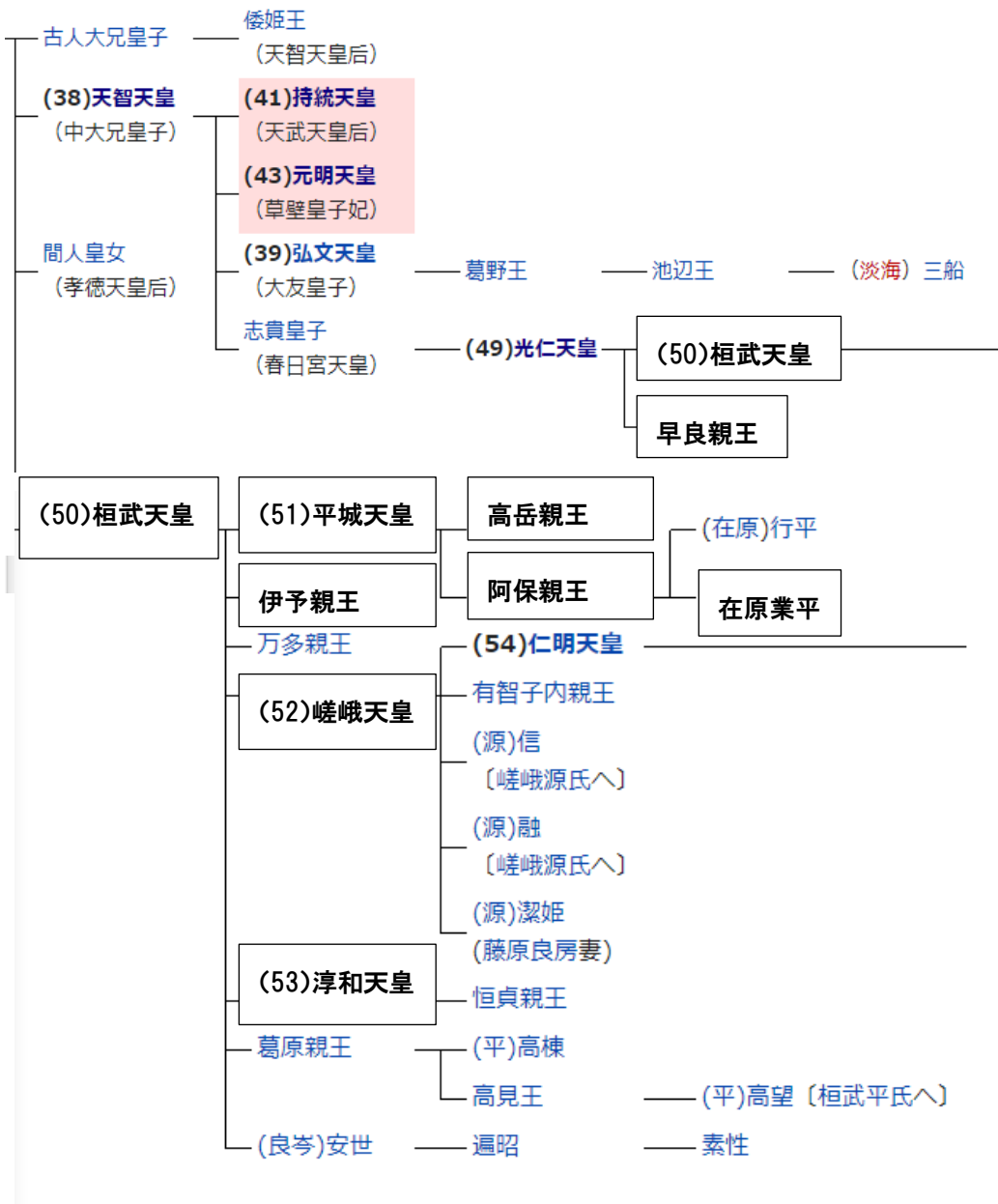


次の表にあるように、この事件で多くの人が処罰された。

変で処罰された人物 〔編集〕

家系	氏名	官位など	処罰内容
皇族	平城上皇	太上天皇	自主的に出家、大権の喪失
皇族	高岳親王	皇太子	廃太子
皇族	阿保親王	四品	大宰員外帥へ左遷
皇族	磯野王	従五位上・図書頭	伊豆権守へ左遷
皇族	田口王	従五位下	土佐権守へ左遷
皇族	真管王	従五位下	吉岐権守へ左遷
藤原式家	藤原葉子	正三位・尚侍	尚侍を解任、のち自殺
藤原式家	藤原仲成	従四位下・参議	佐渡権守へ左遷、のち射殺
藤原式家	藤原安継	従五位下・大舍人助	薩摩権守へ左遷
藤原式家	藤原貞本	従五位下・左近衛少将	飛騨権守へ左遷
藤原式家	藤原永主		日向国へ流罪
藤原式家	藤原山主		日向国へ流罪
藤原式家	藤原藤主		日向国へ流罪
藤原北家	藤原真夏	正四位下・参議	伊豆権守次いで備中権守へ左遷
藤原北家	藤原真雄	従四位下・左馬頭	伊予守へ左遷、のち備前守に転任
紀氏	紀田上	従四位下・尾張守	佐渡権守へ左遷
紀氏	紀良門	従五位下・越後守	肥前権守へ左遷
その他	多入鹿	従四位下・参議	讃岐権守へ左遷、のち安芸守、讃岐権守に転任
その他	菅野庭主	正五位上・木工頭	安房権守へ左遷
その他	大中臣常麻呂	従五位上・兵部少輔	備前権守へ左遷、のち伊予守に転任
その他	大伴和武多麻呂	従五位上・左近衛少将	武蔵権守へ左遷、のち日向権守に左遷
その他	御室是嗣	従五位上	大隅権守へ左遷、のち筑後権守に左遷
その他	御室氏継	従五位上	薩摩権守へ左遷
その他	安倍清継	従五位下・越前介	安芸権守へ左遷、のち伯耆国へ流罪
その他	当麻麿麻呂	従五位下	淡路権守へ左遷
その他	安曇広吉	従五位下	伊予権守へ左遷
その他	百濟王愛答	越前権少掾	安房国へ流罪
その他	永野浄津		越前国へ流罪
その他	伊勢安麻呂		能登国へ流罪

○天皇家系図



4. 経緯を時系列にまとめる。

年度	経緯
781 年	桓武天皇、即位する。
785 年	薬子の父・種継（藤原式家）は桓武天皇の絶大な信頼を受け、長岡京遷都を推進していたが、暗殺される。大伴竹良らが捕縛され、斬首された。光仁天皇の皇子・早良親王（さわらしんのう）が「種継暗殺事件」に関与したとの罪で捕らえられ、無実を訴えたが処刑された。抗議の絶食をして死没したとの説も

	ある。幾度かの鎮魂の儀式が行われているので、無実だったと認識された可能性が高い。
？	薬子が娘婿の安殿親王（平城天皇）と深い仲になり、桓武天皇に宮廷から追放される。
806 年	桓武天皇が崩御し、安殿親王が即位し、平城天皇となる。薬子は東宮に呼び戻されて、尚侍という重要なポストにつく。
807 年	「伊予親王の変」
809 年 4 月	平城天皇、発病。その病を「早良親王や伊予親王の祟り」と恐れ、その災いを避けるために、弟の嵯峨天皇に譲位する。
809 年 11 月	平城上皇の病状が回復する。
809 年 12 月	平城上皇、旧都・平城京へ移り、「葺の御所」を造営役所も整え、多くの腹心の公家を連れていった。 嵯峨天皇の観察使廃止案等によって、二所朝廷と言われる対立が起こる
810 年 1 月	嵯峨天皇が病になる。 後年、嵯峨天皇が淳和天皇に譲位するときに「即位直後に病を得た際に平城上皇から天皇の神璽（しんじ、位を示すしるし）を返すように言われた」と淳和天皇に述べている。
810 年 5 月	嵯峨天皇、蔵人所（くろうどころ、もっぱら天皇に近侍し、詔勅を諸司に伝達する）を新たに設置
810 年 6 月	嵯峨天皇、観察使（平城天皇が政治の刷新を掲げて新たに設置していた）を廃止し参議を復活（これにより平城上皇との関係悪化が決定的になる）
810 年 9 月 6 日	「薬子の変」始まる。 平城上皇、平城京遷都の詔勅を出す 嵯峨天皇、困ったがこの詔に従い、坂上田村麻呂・藤原冬嗣・紀田上らを造営使に任命し、平城京へ派遣する（実際は上皇側牽制が目的）
810 年 9 月 10 日	嵯峨天皇、薬子の兄・藤原仲成を捕らえて右兵衛府に監禁、詔によって薬子の官位を剥奪
810 年 9 月 11 日	平城上皇、自ら薬子とともに輿にのって挙兵を目的に東国に向かう。しかし、大和国添上郡田村迄達したとき嵯峨天皇側兵士に阻まれて断念
810 年 9 月 12 日	平城上皇、平城京に戻り剃髪して出家。薬子は服毒自害。 「薬子の変」終結。

810 年 9 月 13 日	嵯峨天皇、高岳親王（たかおかしのう、平城天皇第三皇子）を廃太子し、弟の大伴親王（桓武天皇の皇子）を立太子させる。高岳親王は出家し弘法大師の弟子となる。
823 年	嵯峨天皇、大伴親王（淳和天皇）へ譲位する。
824 年	平城上皇崩御（51 歳）。 阿保親王（あぼしんのう）、許され平安京へ還る。
826 年	阿保親王、子息の行平・業平の両名の臣籍降下を願い出て許され在原朝臣姓賜与される
847 年	「仁明天皇の勅」により平城京御殿を寺とする。（不退寺伝）

5. まとめ

（1）事変の原因に対する役割を整理する

	平城天皇	薬子	仲成
薬子が娘婿の平城天皇と深い仲になる。 以降、天皇の身も心も絡めとる	○	○	×
薬子の夫・縄主を大宰府に赴任させる	薬子の言いなり	○	×
「伊予親王の変」で謀反のでっち上げを企む	×	○	○
「伊代親王の変」 平城天皇が伊予親王を幽閉し、死に追い込んだ	○	○ 天皇を唆した	×
平城天皇、病になり伊予親王の祟りと思い、退位する	○	×	×
平城上皇が平城京に移る	○	天皇を唆した？	？
平城上皇、平城京遷都の詔	○	天皇を唆した？	？
平城上皇と薬子が平城京を出て東国に向かう	○	天皇を唆した？	すでに捕縛されていたので無関係
田村麻呂の軍勢に包囲され、平城京に戻る	○ （剃髪し、出家する）	平城京に戻るが、服毒自害する	すでに捕縛されていたので無関係

(2) 事変の要因比較

要因	「薬子の変」説	「平城太上天皇の変」説
薬子が娘婿と深い仲になり、天皇の身も心も絡めとる	天皇は薬子に身も心も絡めとられているので、天皇は何かと支配されている。	
伊予親王の変	薬子が伊予親王の謀反をでっち上げるか、または謀反の話を利用し、ひいては崇りの対象を作った。そして平城天皇退位の要因となった。	
平城天皇の退位	薬子・仲成兄妹は退位に反対するが、崇りの要因を作ったのは兄妹。その要因で平城天皇が退位した。それで二所朝廷の対立が起きて、事変が起こった。	経緯は別にして、病に罹ったのはを崇りと考え、禍から逃れるために自らの意志で退位した？
平城京遷都の詔の発令 律令制度で、太上天皇制度で王権を分掌している	薬子が遷都を唆し、それを受け発令した疑いがある。 律令制度に目を付けたのも薬子・仲成兄妹？	経緯は別にして、病が癒えた上皇が復位を念頭に入れて、律令制度に基づき自らの意志で発令。
処罰	嵯峨天皇方は迅速に仲成を監禁し、薬子の官位を剥奪。のちに仲成は射殺された。薬子は服毒自害している。嵯峨天皇側が「兄妹が事変の主犯」と認識している。平城上皇は従犯なので厳罰に処さない。	事変の後も平城上皇は朝覲を受けるなどの名誉ある待遇と相当の宮廷費を受けている。 平城上皇は謀反を起こしたのではなく、制度に基づいて詔を発しているの、厳罰に処さない？

(3) 結論

平城上皇退位後を時系列で整理する

年月日	経緯
809年11月	病状が回復。このごろ、嵯峨天皇に天皇の神璽を返すように要求して拒絶された
809年12月	平城京に移る
810年1月	嵯峨天皇が病になる
810年9月6日	平城上皇が平城京遷都の詔を発令する。
810年9月10日	嵯峨天皇、仲成を捕らえ、詔により薬子の官位を剥奪
810年9月11日	平城上皇が挙兵を目的に東国にむかう
810年9月12日	嵯峨天皇側の兵に囲まれ、挙兵の為の東国行きを断念し平城京に戻り、剃髪し出家する。薬子は服毒自害する。

事変に関して平城上皇や薬子が書き残した史料は残っていないだろうから「事変」への上皇や薬子のかかわり方は状況証拠等で推し測ることになる。

平城上皇が病気から回復後、重祚の意志が出てきたので神璽を返すように嵯峨天皇に打診したが、拒否された。重祚の企ては自らの意志だけなのか、それとも薬子に唆されたのかは分からない。

平城京には多くの腹心の公家を連れて行ったが、その時点で平城京遷都の企てがあったのかも知れないが、平城京遷都を発した後の計画性が見えてこない。挙兵の為に東国に向かうことができないと分かって、あっさり諦めて平城京に戻り、出家しているので、薬子に煽られての行動のように思われる。それほど執着はなく、薬子らに操られた可能性が高いと思われる。

「伊予親王の変」では事変後の状況から、薬子・仲成兄妹が深く関与していると言わざるを得ない。そのために天皇を唆することができるのは薬子だけである。

また、仲成を捕らえて、薬子の官位を剥奪したのは嵯峨天皇側が「主犯は兄妹」との認識で一致していることを示している。薬子が服毒自害したのは、「自分が主犯なので、厳罰に処される」との自覚があったからだと思われる。

「伊予親王の変」が無ければ、平城天皇が病を伊予親王親子の崇りと考えることも無かったので、崇りを避けるために嵯峨天皇に譲位することはなかった。譲位しなければ、そもそも「薬子の変」も起こらなかったということになる。

やはり上皇の身も心も絡めとった薬子がシナリオを書いたのであり、薬子が主役の「薬子の変」と呼ぶべきと思われる。

「5人の子持ちの女性が色香を使って娘婿の若い天皇と深い関係を持って、天皇の身も心も絡め捕り、あやつり、手練手管を駆使して政治や宮廷の人事にかかわって男たちの宮廷を、いや歴史をかき回した」妖女であることは間違いなかる

う。映画の賞に例えると、平城天皇や仲成はせいぜい助演賞で、薬子がやはり主演女優であり、併せて優秀脚本賞も受賞できるかもしれない。筋書きの最後を読み違えたにしても。

薬子がここまでやるとはただ驚き呆れるばかりだが、倫理観を無視して薬子を別の角度から見れば「お見事!!」の一言で表されるか。不謹慎な言い方で、ひんしゅくを買うだろうが。

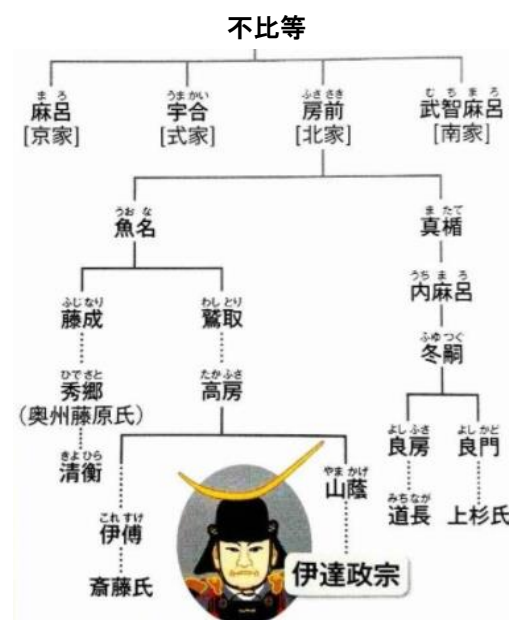
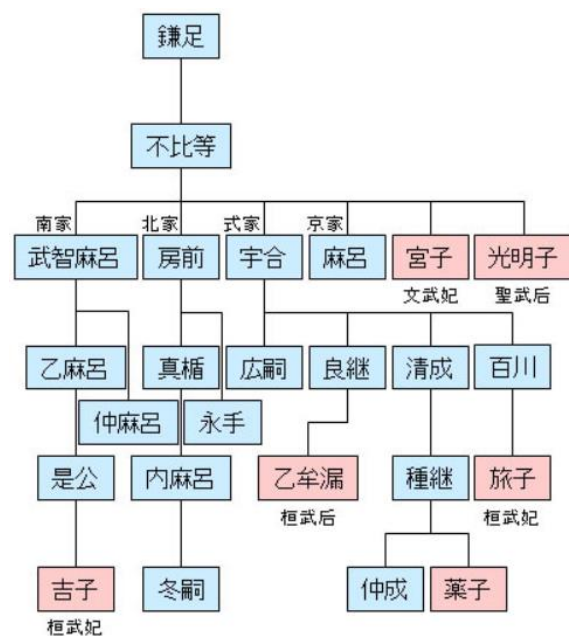
6. おわりに

①その後の藤原家

桓武天皇、平城天皇、嵯峨天皇の時代は、朝廷や天皇家が藤原家の権力争いに翻弄された時代でもあった。

「伊予親王の変」で藤原南家が没落し、その後は藤原式家の薬子や仲成が権勢を振るったが、「薬子の変」により没落。不比等の二男・藤原房前（ふささき）を祖とする藤原北家は「薬子の変」を乗り越え、藤原冬嗣が嵯峨天皇の腹心となり、平安時代における摂関政治の第一歩を築いた。その後も、天皇の外戚として政治に深くかかわるようになり、着々と絶大な権力構造を築いていき、藤原道長の代で絶頂期を迎えることになる。

藤原家の家系図



②「薬子の変」の余波

・事変の後、皇太子になっていた高岳親王（たかおかしんのう）は廃太子され、出家した。弘法大師の十大弟子の一人となり、法名は真如。後年、中国に渡り、そこから仏の故郷・インドに行こうとして、途中ラオスで消息を絶つ。

・平城天皇の第一皇子・阿保親王（あぼしんのう）は事変の後、大宰権帥に左遷される。弘仁 15 年（824 年平城上皇の崩御後、叔父の嵯峨天皇によってようやく入京を許される。阿保親王は天長 3 年（826 年）子息の行平・業平等に在原朝臣姓を賜与され臣籍降下させている。業平は伊勢物語で有名な「在原業平（ありわらのなりひら）」である。業平は多くの浮名を流した。この事変がなければ、業平は誰もが知る「日本の美男の代表」になっていなかっただろう。人の運命というのは分からない。

・この事変で、僧・空海は嵯峨天皇側の勝利を祈念し、勝利した嵯峨天皇の信頼を得て日本仏教界一の実力者になる契機となった。

以上